

## 感謝の過去形

京都教育大学教授

森山卓郎

暑い日、町へ出たときなど、コーヒーショップなどで涼をとりがてら、冷えたアイスコーヒーを飲むのが、わがささやかな贅沢である（ほんま、ささやかですな）。

そこで気づいたのが「ありがとうございませう」。ある「コーヒー屋さんでは「ありがとうございませう」と言わないで「ありがとうございませう」と言うようにというマニュアルになっているらしい。私のゼミの学生がバイトをしている京都駅の食堂でも「ありがとうございませう」ではなく「ありがとうございませう」と言うように指示されているという。なんでも、「ありがとうございませう」だと「過去」のこととして、お客様と「切れ」てしまう感じになるからだそう。いつも感謝しているということもあるかもしれない。

確かに過去を表す助動詞の「た」が

ある。だから「ありがとうございませう」と言うのは一件落着きしてからである。例えば「コーヒーを飲みに来店したばかりの客に」「ご来店、ありがとうございませう」とはふつう言わない。来店だけでは、用件が済んではないからである。

しかし、実は、「ありがとうございませう」は、済んだこととして表さない点で、少し軽い表現でもあるように思う。例えば、「あ、糸くずが付いてますよ」と、それを取ってもらったときなど、ふつうは「あ、ありがとうございませう」とか「すみません」とか言いそう。私の語感では、たかが糸くずで、「ありがとうございませう」すみませんでした」と言うのと大げさな感じがする。つまり、「ありがとうございませう」の場合、「感謝すべき事態があった」ということを認識する点で、

一定の「重み」があるのではないだろうか。例えば道を教えてもらった場合、「こっただよ」という程度なら「ありがとうございませう」で済みそうだが、「わかりにくいから一緒に行ってあげよう」などと大変お世話になったとすれば、終わって「本当にありがとうございませう」などと過去形で言うたくなる。

こう考えると、「ありがとうございませう」は「関係が切れてしまうような水くさい挨拶」ではなく、むしろ「過去のこととして、特に認識したことを表す深い感謝」ということになる。本当に深い感謝を表すなら、件の接客マニュアルは見直すべきなのかもしれない。感謝にも過去形がある日本語は、深いのである。

今回も、最後まで読んでくださって、本当にありがとうございました！